

自尊心

本当の自尊心とは？

Self-esteem ? Self-respect ?



砂川 満

自尊心

砂川 満

目次

Contents

自尊心.....	1
私がいちばん.....	17
自尊心に関する証の文からの引用文.....	27
心を治める方法.....	36

※この内容は、2008年8月30日に今帰仁教会にて話された礼拝説教の内容を収録したものです。

自尊心

特別賛美歌を聞きながら自分がバプテスマを受けた時のことを思い出しました。1978年6月24日ですから、30年経っています。今年は2008年ですので、今から30年前の6月にバプテスマを受けました。

中学2年生の時でした。13歳、14歳の若い年齢ながら、幼い自分なりにイエス様と共に生涯生きて行きたいと、思いました。そして自分なりにこの生涯をイエス様に捧げる決意の表明として、バプテスマを受ける決心をしたわけです。

もうひとり、三育中学校で学んでいる同級生の友人と一緒にバプテスマを受ける決心をしてくれました。皆から祝福されて名護の屋部の海岸でバプテスマを受けました。

あれから30年も経っているのが信じられないくらいです。

そのときに、他の学生たち、同級生の仲間たち、先輩、後輩の皆さん、先生たちも祝福して下さいました。そして自分の親兄弟も駆けつけてくれました。

5年前に亡くなった父親と、姉、そして家族がそこに駆けつけてくれて私のバプテスマを祝ってくれました。皆に祝福されたすばらしい思い出として残っています。

エペソ人への手紙5章11節をお読みします。

「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」。

今日の礼拝の主題は「自尊心について」であります。難しい話かなあとと思われるかもしれませんが、皆さんと一緒にどういうことなのか上手くまとめられたらと思っております。

自尊心について考えるようになったきっかけは、6月に出た“Anchor”であります。ここにいらっしゃる殆どの方は読まれましたよね。主に何のことが取り挙げてありましたか。メガチャーチについてです。メガチャーチについてもう説明はしませんが、じっくりと“Anchor”を読まれたとして、話を進めて行きます。

そこには、メガチャーチに関する記事が立て続けに三つ出てきます。それを読んでいて私の目についた言葉があったんです。それが自尊心だったんです。

この話の前に少し付け足しますが、このメガチャーチについての記事の情報はアメリカ在住の井上さんご夫妻から流れてきているのです。井上さんご夫妻は、アメリカで盛んに講演しているファイトという博士の講演内容からメガチャーチのいろんな情報を得てこちらへ流してくれているという経緯があるのです。

ところが、先ほど話してくれたエルマーさんもファイト博士がドイツ人である故に、ドイツで講演している場にいたことがあるそうで、彼の教える健康について・預言について・そしていろんなこと、さらにメガチャーチについてよく知っているそうです。

そういう意味でも、彼らと出会ったことは不思議千万だと考えているわけです。

“Anchor”の中のメガチャーチについての記事を見ますと、今メガチャーチで活躍している人々を指導した中心的な牧師の名前がロバート・シューラーという人です。

ここにはっきり書いてあるので、隠す必要はないんですが、彼はフリーメイソンの高い地位についている人です。フリーメイソンというのは、はっきり言えば、ルシファー崇拜です。サタン崇拜です。そういう裏があるということです。

シューラーという人の言葉がいくつか書いてあって、「(聖書の教えている)生まれ変わる、新生、という意味は、悲観的から楽観的に、劣等感から自尊へ、おそれから愛へ、疑いから信頼へ変わるということである。」

「罪とは人間の自尊心を奪い取ってしまうような何らかの行為、また考えである」と説明しているのです。

聖書は何と言っていますか。罪とは不法、律法に違反することであると教えています。

しかしこの人は罪とは人間の自尊心を奪い取ってしまうような何らかの行為、また考えであると言っています。

次の記事を読みましても、メガチャーチの問題点というところで、個人の必要を満たすということを優先させるというところに「メガチャーチの法は会衆が娯楽を必要とすればドラマ、演劇を提供して楽しませるのである。自尊心(プライド)の喪失から救い、空しさ、孤独からの解放、自己満足、興奮の手段を与え、自分の心の欲望を満たす方法を提供する。」

自尊心を失った人をその状態から救い出したいという方法を

取っているそうです。メッセージは神からの悔い改めを、そして救われよう…ではなく、人の自尊心を傷つけないように、耳触りの良いことを説いて喜ばせる。

自尊心を強調しているロバート・シューラーの説く福音を“Anchor”の中では、彼の“自尊心の福音”とあって、それが彼の弟子ともいえる現在メガチャーチをどんどん建てている指導者的立場にある牧師たちに受け継がれていったと書いてあるんですね。

自尊心の何が悪いんですか？ということをもまず自問して頂きたいと思います。

証の書を調べてみると自尊心についてたくさん書いてありました。人類のあけぼの上巻 285 ページ、「神のみこころは、人間の自尊心を傷つけるような方法でなされるべきであった」と書いてあると思いきや、家庭の教育 155 ページ、「賢明な教育者は生徒を取り扱うときに、信頼心を深め、自尊心を強めることに努力する。信頼されているということは子供たちにとって益となる。たいていの子供は、どんな小さな子供さえも、強い自尊心を持っている。信頼と尊敬をもって扱ってほしいというのはみんなの望みであり、それはまた彼らの権利でもある。」と書いてあります。

ここでおかしいなあと思わなかったらおかしいですよ。

皆さん、何か感じます？そこでいろいろ調べてみました。

聖書には、自尊心という言葉はありませんでした。英語でも日本語でも探せませんでした。証の書を調べると、自尊心の元になっている言葉が、主に二つありました。

Self-esteem と Self-respect という言葉です。

自尊という言葉の定義は、広辞苑を引いて見ますと、

- ①自ら尊大に構えること。自惚れること。
- ②自重して自ら品位をたもつこと。

このように2種類の定義がありまして、証の書も2種類の言葉を使って区別していたんです。

結論から言いますと、神様は預言者を通して①の自尊心 (Self-esteem) を罪と等しいものに位置付けておられます。

一方②の自尊心 (Self-respect) は、大切に育てなさい。

これは、みんなにとって大事だよとおっしゃっています。これが結論です。

もう一つ結論をいうならば、メガチャーチの福音派の指導者達が、これぞ福音と呼んでいる自尊心の福音は英語を見たら分かりますけれども、①の自尊心 (Self-esteem) が使われています。

何処を見ても②の自尊心 (Self-respect) については、説かれていません。①の自尊心 (Self-esteem) が大切だと、これを喪失した人は、これを取り戻して大切にしなければいけないと、①の自尊心 (Self-esteem) を決して傷つけてはいけないと説いていて、どんどん人々から受け入れられていて、あれほどの教会に成長しているわけです。

わたしは御言葉から、この①の自尊心 (Self-esteem) の福音は、偽の福音だと言わざるを得ません。①の自尊心 (Self-esteem) を英和辞典で引くと、自尊心の他に自負心、自惚れともありました。

このように辞典でもはっきりと自負心、自惚れと関係していることが分かります。見ていくと分かるんですが、たいていの場合、ホワイ夫人は①の自尊心 (Self-esteem) を証の書の中で使う時は、罪、誇り (Pride) とをセットで使っています。人間の罪に付随するものとして①の自尊心 (Self-esteem) を使っているんですね。

例えば、家庭の教育 139 ページに「誇り、自負心、大胆さは今日の子供たちの特徴であり、またこの時代ののろいです」と書かれています。

教師への勧告 92 ページには、「自尊心 (Self-esteem) という悪は利己心から生ずる」とはっきり書かれています。「Self-esteem という悪」とホワイ夫人は、はっきり言っています。それは「利己心から生ずる」と。

皆さん、罪の根源は何ですか。罪はいろんな形で現れますよね。そのひとつが Self-esteem の自尊心だとホワイ夫人は言っています。

罪のおおもとは何でしょうか。自分・自分・自分の利己心ですよ。

サタンがルシファーとして天国にまだ住んでいた時の彼の心の状態が、イザヤ書 14 章に書かれています。彼の抱いた野望が載っています。特にそれを欽定訳聖書で見ると分かりやすいのですが、「わたしは神の御座まで登ってやる」…わたしは・わたしは・わたしは…「わたしはいと高き者のようになろう」と書いてあります。…わたし・わたし・わたし……。これが罪の根源です。利己心です。

まあ、言葉遊びでもありますが、Sin というのが英語で罪を意味する単語です。

S・I・N の真ん中に、I があります。英語で I は「わたし」です。わたし・わたし・わたし……これが罪の中心なんです。

ちなみに Pride(誇り) という言葉も、真ん中に I があって、わたし・わたし・わたし…。

Crime(犯罪) もどういふわけか真ん中に I がありますね。罪、誇り、犯罪は英語で見る限り、わたし・わたし・わたしが真ん中にはいっています。偶然だとは思いますが。

その利己心から①の自尊心 (Self-esteem) は生じていると預言者は言っているんです。ですから、罪と共にわたし達の内から、この①の自尊心 (Self-esteem) を、排除しなくてはいけないんです。

今まで人生何十年か生きて来て、世の中において或いは別の教会に於いて、そしてわたし達のこの教会に於いて、この自尊 (Self-esteem) が良いものであると学んできた人達は、それを今ここで捨てなくてはなりません。

ここで捨てきれなくても、遅かれ早かれ捨てなければいけません。何故このような言い方をするのかといいますと、世の中はテレビを見ようが映画を見ようが本を読もうが、この自尊心 (Self-esteem) は素晴らしいものだと、どこでもそういう思想が溢れているからです。

一般社会で生きていたら気付きますね。「自尊心は良いものだ、自分の自尊心と同様に他人の自尊心も決して傷つけてはいけな

い」というのが、世の中の風潮ですよ。

「自尊心を大切にし、自尊心を失った人は取り戻しましょう」と、これが一般の世の中の教えです。素晴らしいものとして教えられているのです。

世の中のみならず、キリスト教会に於いて、この Self-esteem の自尊心が素晴らしいもの、わたし達にとってなくてはならないものとして教えられています。そういう教えが入って来てきます。

このメガチャーチと合同して伝道活動していこうと、わたし達の教会がそういう方向に進んでいる今、わたし達の教会に簡単に Self-esteem の福音が入って来ているのではないかと、わたしはそのように危惧しているわけです。

ですから、皆さんが何処であろうと他の教会に行かれて、もし自尊心についてのメッセージを聞いた時は、よく注意してどちら側の自尊心のことをこの人は教えているのだろうか、警戒網を張ったらいと思います。

しっかりと見極めて、もしそれが①の自尊心 (Self-esteem) であるならば、闇の世の主権者から来ている教えです。残念ながら、これは教会で聞かれようが世の中で聞かれようが、悪魔から出た福音であります。そういう確信が持てた時には是非、賢明な方法で指摘して頂けたらいいと思います。

自尊心はたびたび誇り (Pride) とセットにして用いられていると言いましたけれども、ガラテヤ 6 章の 14 節でパウロは「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」と言っ

ています。

わたし達クリスチャンが誇れるのは、主イエス・キリストの十字架だけであります。それ以外にわたし達は、自分の家族であろうが、妻であろうが、夫であろうが、自分の富、知識、地位、能力等々何一つ誇れるものはないわけです。そういうことに少しでも誇りを感じた時に、わたし達の内に誤った自尊心が助長されて行くことでしょう。罪もろともこの自尊心をわたし達の内から取り除いてもらわないといけないんですね。

かたや、②の自尊心 (Self-respect) は、わたし達の内に失ってはいけないものであると、預言者は教えています。

辞書で引くと Self-respect は自重と書いてありました。自重というのは「自分の品位を保ってみだりに卑下しないこと」とあります。

ちなみに、①の自尊心 (Self-esteem) をコンピューターソフトでホワイト夫人の書物を調べると 330 ほど出てきました。②の自尊心 (Self-respect) は 220 ほど出てきました。

ですから、ここで取り上げるのはほんの一部です。この②の自尊心は、わたし達にとって大事なものであると預言者は教えているんですね。

アドベンチストホームの 485 ページと教育の 284 ページに「自尊心 (Self-respect)、すなわち人としての真の威厳に対する尊敬また人類という大家族のひとりびとりに対する関心……」とありました。

これがまさしく②の自尊心 (Self-respect) の定義だと私は思い

ます。できたら、これだけは憶えて頂きたいですね。

先週の証の場で申し上げたと思いますが、黙示録 1 章の 6 節を引用しましたよね。欽定訳聖書を見ると、「父なる神のためにわたし達をみ国の王とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように」と、記者ヨハネは述べているんですね。

わたし達は父なる神の為にみ国の王としてまた祭司として召されているということ、ここでもう一度申し上げたいと思います。欽定訳ですがペテロ第 1 の 2 章 9 節も「あなたがたは、選ばれた種族、王家に属する祭司、聖なる国民、神につける民である」とあります。

そういう認識をもう一度新たにして頂きたいですね。それは何のためか、次のところに書いてあります。

それは、「暗闇から驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」と書いてあるのです。

わたし達は神の証人として、驚くべき御業をなさった方を証する証人として召されているのです。この世界のみならず、全宇宙にそのことを証すべく召された天の王の息子・娘なんです。故に、わたし達も王家に属する天の王子・王女であると言えるんですね。

聖書はその教えを支持しています。暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったお方の御業をわたし達が語り伝えるために、神さまから王の息子・娘として、王位継承者として召されているのです。

王位継承者とは何ですか？通常この世の中で王が死んだら次の王として立てられるわけですね。全能の神様は不死のお方ですから、永遠に宇宙の王として君臨なさいます。でも、わたし達をなおも王位継承者として召し、そのようなものに立てて下さるのです。

天の王につく王として祭司として、わたし達は召されていると書かれているんですよ。

ヨハネ第1の手紙3章1節「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい」。ヨハネは何と言っていますか？「よく考えてみなさい」と書いてありますね。

だれでも知っている聖句をお読みします。

「神はひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。

意味が分からなくてもスラスラと言える聖句ですね。もう少し意味を深めてみましょう。

欽定訳聖書には、「神は世を愛するがあまり、たった一人の息子を与えて下さった」と書いてあります。この世において罪のうちに失われているはずのわたし達を愛するがあまりに、その大きな愛の故にたったひとりの御子をわたし達の為に与えて下さったのですね。

それぐらいわたし達は神様の目には価値があるんです。そのように考える時、わたし達の内に自尊心 (Self-respect) が芽生え、

育っていくんです。それは神様のご計画によるものです。

本来、罪の奴隷であったわたし達、三天使の使命を宣べ伝えるべく召されているわたし達でさえも、かつては罪の奴隷でしたね。ある意味では今でもそうかも知れません。そういうわたし達がやがて、バビロンは倒れたと世に向かって叫ぶんですよ。

「バビロンは倒れた」とは究極的には何ですか。わたし達の内にバビロンがあるんです。バビロンとは『混乱』。わたし達の心がサタンに付くか神に付くか、「神様、神様に仕えます」と言いながらサタンの業をしていたり、サタンのような考えをしていたり、…自分・自分・自分・自分…「こうしたら他人に何と言われるかな」、誰かに何か言われたらカッとなって、「何だと！」と腹を立ててみたり、ちょっと注意されただけでムカ～っときてみたり、そのたびに自分の欲望に負けてしまったり、その度に神様に仕えていると言いながらサタンに仕えている自分がいる。

どっちつかずの混乱した状態の自分があるわけですが、神様はそのような状態で苦しんでいるわたしたちを完全に罪の状態から救い出そうと計画しておられます。

その計画が成ったときにわたし達は、本当の意味でバビロンは倒れたと宣言することが出来るようになります。

罪もろとも、①の自尊心 (Self-esteem) が完全に取り除かれ、一方で②の自尊心 (Self-respect) が育てられ、我々を支配して、神様の品性を表わすものとなって行く。

これが神様のご計画であり、そうすることにより初めてわたし達は、暗闇から驚くべきみ光に招き入れて下さった方の御業

を語り伝えることが本当の意味で出来るようになるわけですね。

そのために神様はわたし達を訓練なさいます。わたし達を時には懲らしめることがあるでしょう。

子育てしていてそのことがよく分かります。神様もわが子を扱うようにわたし達を扱われますね。

詩篇 23 篇 4 節「たといわたしは死の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」

この「むち」を神さまはお用いになるんですね。羊飼いとて、イエス様は羊たちにむちをあてられます。

この「むち」という言葉をヘブル語で調べてみたら、小枝、若枝、棒と書いてあります。しかも「棒」というのは何のための棒かといいますと、罰したり懲らしめたりする棒、あるいは身を守るための棒、歩くための棒と書いてありました。

ですから「むち」と「つえ」と書いてありますけれども、同じ意味なんですね。羊飼いの持っている棒、それがすなわち「つえ」であり「むち」でもあるんです。

羊たちが変な方向に行こうとしたら棒で軽く叩いて、それでもだめなら強く打って懲らしめるわけです。そうすることによって羊たちを正しい道に羊飼いは導くのです。

神様はそのような方法でわたし達を時には懲らしめ、訓練なさるわけですね。

子育ても同じです。箴言にたくさん書いてあります。子供に

むちをあてなさいと。言い訳かも知れませんが、子供のおしりをたたくことは、気持ちいいとは一回も思ったことはないですよ。皆さんもそうでしょう、親としておわかりでしょう。

子供を懲らしめて「ああ、すっきりした」と思ったこと一度もありません。わたしも子供のお尻に何度もこの大きな手でむちをあてましたけれども、楽しかったことは一度もありません。それでもやらなければいけないから、御言葉が「やりなさい」と教えているから、やっているんです。

正しく子供を指導する方法を教えてくださいと願い求めた時に、「こうこうしなさい」という声は聞こえませんでしたけれども、神様は御言葉で教えてくださいました。聖書と証の書の言葉でたくさんのお話を教えてくださいました。

箴言に、子供を懲らすことを怠ってはならない、むちをくわえない親は子供を憎んでいることになる、望みのある間にその子を懲らせと書いてあります。泣くからと言って容赦してはならないとも書いてあります。泣いたら容赦したくなるんですが、「箴言に書いてあるさ」と思いながら容赦なく懲らすこともありました。

そのみ言葉を実行したときに、神様は祝福として結果を刈り取らせてくださいました。み言葉に従わないときはやはりうまく行かないんですね。それは往々にして痛みを伴いますけれども、子供を育てるにあたっては、「むち」は決して差し控えてはならないものだとこの場で断言することが出来ます。

と同時に先ほどの子供の話にもありましたけれども、徐々に徐々に子供が自分でサタンの力と戦うことが出来るように教え

てあげなければいけないんですね。「謝らんともっと叩くぞ」といったような脅迫的な方法はいかがなものか…と思います。徐々に自分で戦う方法、イエス様に直接頼って戦う方法を教えてあげていきたいと思っております。

しかし本当に幼い時はこういう言葉もあります。「子供が一人では戦うことが出来ない戦いを、親が戦ってやらねばなりません。」

何が善か何が悪か最初は分からないんです。生まれた時から、下手するとお腹の中にいる時から霊の戦いは始まっていると預言者は言っています。そういう自覚を持って、生まれた時から子供を扱ってまいりました。

もうすぐ3年になりますけれども、これで大丈夫というにはまだほど遠い状態です。しかし、ここで安心したり諦めたりすることなく引き続きわが子の内から①の自尊心 (Self-esteem) を親として出来るだけ取り除く手伝いをしてやりたいですし、子供のうちに親からどれだけ愛されているかということ、それ以上に神様は自分を愛しておられるのだということをしかりと教えていくことによって、子供は②の自尊心 (Self-respect) を内に育てることが出来るようになるわけです。

そのことを神様はわたし達の内に成し遂げようとしておられるのです。その経験を積むように計画しておられます。

残念ながら年を取れば取るほど、この自尊心 (Self-esteem) は強まってくる傾向にあります。子供の間はどういう形であれ、よく叱られるし、注意されますよね。大きくなると徐々に注意する人がいなくなってきました。欠点が無くなって来たんですか？

とんでもないです。

だけど、たまに誰かに注意されようものなら、目つきがとたんに変わるんですね。あるいはその人といたくないと避けるようになります。

何故？ わたし達の中にまだまだ自尊心 (Self-esteem) があるからです。神様はわたし達の内にあるこのバビロンを完全に倒したいと計画しておられます。協力しましょう。そして神様の計画がわたし達の内になるように、信仰によって信じ、それを捉えて我ものとしたいものです。

私がいちばん

私たち人間を含むすべての生き物、また私たちの世界を含む全宇宙は、様々な法則に支配されています。

法則

- ①必ず守らなければならない規範・おきて
- ②いつでも、またどこでも、一定の条件のもとに成立するところの普遍的・必然的關係。また、それを言い表したものの。

「・・・自然の法則は神の律法であるということ、すなわちそれは神の十戒と全く同じように神聖なものである。神は、肉体の機能を支配する法則を、身体のすべての神経と筋肉と組織にしるされた。これらの法則の一つでも不注意にあるいは故意に犯すことは、創造主に対する罪悪である」(家庭の教育 389 ページ)。

「自然の法則は神の律法であるから、これらの法則を注意深く研究することは明らかにわれわれの義務である。われわれは自分の身体に関するその規定を学んで、それに従わなければならない。これらの事に無知であることは罪である」(食事と食物に関する勧告 10)。

「・・・神の律法であるすべての自然の法則は、われわれの益

のために設計された。これらに従うことは、現世での幸福を増進し、来世への準備をする助けとなる」(同 23)。

これらの引用文から、万物の創造主であられる愛の神様が、道徳律と同様に自然の法則をつくられたのであり、神の律法と同じく、自然の法則を犯すことも罪であり、命取りとなり得ることが分かると思います。

「あなたは天の法則を知っているか。そのおきてを地に施すことができるか」(ヨブ 38：33)。

この世界が創られる前、天において、神様の法則・律法が破られました。ルシファーという最高位の天使が、キリストに嫉妬し、さらに神の地位をむやみに欲しがり、天で謀反を起こしたのです。三分の一の天使が彼に従いました。

「永遠の命とは、唯一まことの神にいますお方と、イエス・キリストとを知ること」(ヨハネ 17：3)とありますが、神様と私たちとの関係を夫婦関係になぞらえると、天父とキリストを知ることとは、すなわち一つになることだということが分かります。

神の大法則 I — 命の源であられる神、キリストと一つになること → 永遠の命

逆に — 命の源であられる神、キリストに背を向け(背き)、離れること → 永遠の死、滅び

イザヤ書 59 章 2 節を見ると、私たちの不義と罪が、神様との間を隔てるとあります。

イザヤ書 14 章 12 - 14 節を見てみましょう。欽定訳からお読みします。

「黎明の子、ルシファーよ、あなたはどのようにして天から落とされてしまったのか。あなたはどのようにして切り落とされて地に倒れ、国々を弱めたのか。それは、あなたが心の中でこう言ったからである。『私は天にのぼりつめ、私は自らの王座を神の星の上にまで高め、また私は、北の果にある集会の山に座し、私は雲の頂にのぼり、私はいと高き者のようになろう。』」

神の大法則Ⅱ — 「・・・あなたの目は高ぶるものを見て、これを低くせられる」（サムエル下 22：28）。

「彼は高ぶるものを低くされるが、へりくだる者を救われる」（ヨブ 22：29）。

「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」（ヤコブ 4：6）（1ペテロ 5：5）。

かくして、被造物の中で最高位にあったルシファーはサタンとなり、最も墮落した者となりましたが、彼に欺かれ、同様の道を歩む人が跡を絶ちません。

その流れを断つ方法はただ一つ—神様の定められた法則すなわち律法に従うことです。

但し、これらの法則や律法の根底に流れている原則は愛であり、これらに従うには、神様との真の愛情関係に入るしかありません。つまり父なる神またイエス・キリストと堅い愛情の絆で結ばれることです。

ここで敢えて提案したいことがあります。それは一番になること、または一番を目指すことです。

Q. でも、ルシファーは、自分が一番だと自惚れ、さらに一番になろうとして墮落し、サタンになったのではなかったのでしょうか？

十二弟子のことを思い出してください。彼らは三年半、イエス様と過ごしましたが、キリストの精神にあずからなかったのは、ユダだけではありませんでした。十字架の前夜まで、全員が一番弟子になりたいとの野心を捨てきれずにいがみ合っていましたね。イエス様を愛し、慕ってはいましたが、それ以上に御国での高い地位を求めていました。しかし、イエス様の死という大失望を味わい、その試練を乗り越える過程で深い悔い改めと自我に死ぬ経験にあずかった11人は、キリストの福音と品性を世界中に伝える大伝道者へと成長していったのでした。彼らを福音宣教へと駆り立てた動機は、もはや高い地位につきたいとの野心ではなく、「私自身のためにあれほどの犠牲を払ってくださったイエス様の愛を多くの人に伝えたい」との一心でありました。

十二弟子の中でも突出していたのがヨハネでした。ヨハネも

かつては一番弟子になりたいとの野心を抱き、癩癩持ちで欠点だらけの青年でしたが、イエス様の公生涯中も、天に昇っていかれた後も、イエス様を慕い、だれよりも救い主のそば近くにいたいと熱望し、キリストとの親密な交わりを続けているうちに、イエス様に似た品性の持ち主へと変えられていったのでした。

「艱難から栄光へ下巻」の「愛された弟子」という章からお読みします。

「ヨハネは、ほかの使徒たちより、イエスがとりわけ『愛しておられた弟子』である。・・・愛弟子に対する救い主の愛情は、力いっぱい、燃えるような献身で報いられた。ヨハネは、ぶどうのつるが堂々とした柱にからむように、キリストにぴったりとついて離れなかった。主のために彼は法廷の危険をもものもしなかつたし、十字架を離れずにいた。またキリストがよみがえられたという知らせに、すぐさま墓へ急ぎ、その熱意においては性急なペテロにさえもまさっていた。ヨハネの生活と品性にあらわれていたキリストへのひたむきな愛と無私の献身は、キリスト教会に口で言い表せない価値のある教訓を与えている。」

「神の国ではえこひいきで地位は得られない。それは働いて得るものではなく、気まぐれにさずけられて受けるものでもない。それは品性の実である。王冠と王座は、達成された一つの状態のしるし、すなわち主イエス・キリストの恵みによって、自我を征服したしるしである。」

「キリストに対するヨハネの愛情の深さと熱烈さは、ヨハネに対するキリストの愛を引き起こしたのではなく、かえってヨハ

ネに対するキリストの愛の結果生じたものである。ヨハネはイエスのようになりたいと望んだ。・・・自己はイエスの中に隠された。ヨハネは仲間たちの誰よりも、その不思議ないのちの力に服従した。」

「ヨハネは、キリストに抱いていた深い愛により、いつもキリストのそば近くにいたいと願った。救い主は十二人の弟子たちみんなを愛されたが、ヨハネの気持ちは最も感受性に富んでいた。・・・そして、だれよりも子供のような打ち解けた信頼からイエスに心を開いた。・・・イエスは天の父を代表する人々を愛される。・・・ヨハネは敬慕と愛を抱いて救い主を見つめているうちに、キリストに似た者となった。」

（客観的に言うと）神様は、すべての人を、分け隔てなく愛しておられます。・・・しかし、（主観的には）神様はとりわけ、私を特別に愛しておられると心から思っていないクリスチャンは、宗教生活において何かが間違っています。

「天の王子たち、すなわちこの強力な王国の有力者たちは、もっぱら善いことに限ってのライバル同士であって、お互いの幸福と喜びとを追い求める。・・・最も大いなる者は、最もうぬぼれの小さい者である。その最も小さい者の感謝と豊富な愛は最も大きい」（終末時代の諸事件 175）。

この世の中では、いかなる競争も、他者を蹴落とすことに勝利の秘訣があります。一番になるには、汚い手を使おうが、正々堂々と臨もうが、自分がのし上がることに万事がかかっています。しかし、私たちの参加すべき、神の国を目指す競走はそうではありません。全く次元の違うものであり、それはある意味、俗人である私たちには異質のものであり、神秘〔奥義〕とも言

えるでしょう。私たちは、その奥義を、御言葉と日々の経験の中から見つけ出すことによって、イエス様に最も愛され、イエス様を最も愛する者となることができるのです。

ペテロ第一の手紙2章の9節と10節をお読みします（一部欽定訳に変えて読みます）。

「しかし、あなたがたは、選ばれた世代、王家の血を引く聖職者、聖なる国民、特殊な民である。それは、暗やみから驚くべき光へと招き入れてくださった方のみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。あなたがたは、以前は神の民でなかったが、今は神の民であり、以前は憐れみを受けたことのない者であったが、今は憐れみを受けた者となっている。」

自分自身の人生を振り返って見ますと、私もかつては、キリスト教のキの字もない家庭に生まれ育ち、暗やみの中にいながら、そのことにすら気づかずに生きておりました。しかし、そんな私が、イエス様と共に真理の光の中を歩むように招き入れられ、愛する家族とともに主の御業の一端を担わせていただいていることは、ただ神様のお恵み、奇跡としか言いようがありません。そのことを思うだけでも、自分はなんと恵まれ、愛されているのだろうと、感謝の念以外は湧いてこないであります。

《まとめ》

最もキリストに愛され、キリストを愛する人は？

- ・だれよりもイエス様と共にいたいと熱望する。 → だれよりもキリストの品性にあずかりたいと望み、努める。

そのような人は、

- ・だれよりも自分の罪深さを自覚する。→ 誰よりも謙遜
- ・だれよりも祈る。 — つまり主との交わりを欲する。
- ・人間関係がこじれたときは、だれよりも素直に反省、謝罪し、関係の修復に努める。
- ・だれよりも親切を心がけ、自己犠牲をいとわない。
- ・だれよりもイエスの教えに従い、実践する。
- ・だれよりも平安で幸福。
- ・自分と他人を比べて、一喜一憂しない。

敢えて「誰よりも…」と申し上げましたが、これはあくまで自分と神様との一対一の関係であります。ほかの人と比較するものではありません。ただし、先ほどの引用文を繰り返しますと、私たちは、「もっぱら善いことに限ったライバル同士であって、お互いの幸福と喜びとを追い求める」のです。善を行うことだけは、互いに切磋琢磨（せつさたくま）すべきであるということです。

「さまざまな働き分野において、あなたの責務が何であれ、神が私たちの司令官であられることを常に覚えなさい。あなたは彼から離れて肉を頼みとしてはいけません。私たちはあまりにも、働きの重要性について自分の価値判断に頼り、互いに比較し合いがちです。しかし、こういった比べ合いは、大いに的外れなことです。主は、地位や階級で人を評価なさいません。あなたがどれだけキリストの精神を抱き、あなたの生活でどれだけキリストが表されているかを見られるのです。主を最も愛

する人は、最も真剣にそして一心に神の御声を聴き、彼が最も愛する者となるとき、かれは天の父から最も愛される者となります。『私に学びなさい』と、世が知る中で最も大いなる教師は言われます。『私は柔和で心のへりくだった者であるから、あなたの魂に休みを与えるであろう』と」(S p M 88)。

もし私たちが神様の愛に応えるならば、神様は、親が愛する子を訓練するように、御自らお定めになった理想、目標点に到達するよう、私たちを訓練し育てようとなさいます。

「あなたがたに関する『神のみこころは、あなたがたが清くなることである』あなたがたもそう願っているだろうか。あなたがたの罪は山のようになっているかもしれないが、十字架につけられ、よみがえられた救い主のいさおしにすがって、へりくだり、罪を告白するならば、神はあなたがたをゆるし、あらゆる不義から清めてくださる。神は神のおきてにまったく一致するよう要求なさっている。このおきては、『もったきよくなれ、もったきよくなれ』と語りかける神の御声のこだまである。キリストの恵みに満たされるよう望みなさい。キリストの義を求め切なる願いで心を満たそう。神のみことばが述べる義は平和をつくり出し、とこしえの平穏と確証をもたらすのである。あなたは神を慕うにつれて、その恵みの無尽蔵の富をますます知るようになる。この富について瞑想すると、この富があなたの手に入り、キリストの犠牲と功績と、その義の擁護と、その知恵の豊かさ、そしてあなたを天父の前に『しみもなくきずもな』い者として差し出してくださるみ力が明らかに」(患難下 270)。

先週の説教に、子を亡くした親の話がありましたが、たとえば親が何人子供をもうけても、亡くなった子の代わりとはならな

いように、その御心に従ってお創りになり、手塩にかけて育てられた私たちのうち、たとえ一人でも失われるなら、神様のお心にできた穴を何者も埋めることはできないのです。神様は、私たち一人ひとりと、一對一の最高の関係を築くことがおできになります。それが全能の愛の神様です。それが実現できるか否かは、私たちにかかっているのです。

「また忠実な証人、死人の中から最初に生まれた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の王とし、祭司としてくださった方に、世々限りなく栄光と権力とがあるように。アーメン！」（黙示録1：5－6）。

自尊心に関する 証の文からの引用文

自尊

- ① 自ら尊大にかまえること、うぬぼれること。
- ② 自重（自分の言動、体に注意すること）して自ら自分の品位を保つこと。

① **Self-esteem**—自尊心、自負心（自分の才能や仕事に自身や誇りを持つこと）、うぬぼれ

「サタンは、常に、神の民の中に、不信と離反と悪意を持ち込もうとしている。われわれは、実際は何の原因もないにもかかわらず、自分たちの権利が侵害されているように考えたいことがよくある。キリストと彼の事業を愛することよりも、もっと強く自分を愛する者は、自分自身の利益をまず第一にし、どんな手段を講じてでもそれを守り、維持しようとする。良心的なクリスチャンと思われる多くの人々でさえも、誇りと自尊心のゆえに、過ちを犯していると思われる人々のところへ個人的に行って、キリストの精神をもって彼らと語り、互いのために共に祈ることをしないのである」（患上 329）。

「誇り、自負心、大胆さは、今日の子供たちの特徴であり、ま

たこの時代の呪いです・・・」(家教 139)。

「・・・利己心、おのれを愛する心、自負心、放縦は、繁殖を続けているうちに、ついには、不幸と破滅を招く・・・」(家教 159) (教育 115)。

「そこ〔教会堂〕は神が自ら臨在したもう場所なのですから、その聖所に入るとき礼拝者は厳粛な畏敬の念をもち、この世的な思いはみな捨て去らねばなりません。そこは大いなる永遠の神の謁見室です。ですから、神が偶像崇拜としてお嫌いになる高ぶりや激情、不和や自負心、わがままや貪欲などは、そのような場所にふさわしくありません」(家教 593)。

「・・・また、利己主義、利己心〔自己愛〕、自尊などの性質やわがままな行動には、すべて、それ相当の収穫がある。利己的な生活をして、肉の種をまくものは、その結果として滅びを刈り取るのである」(実物教訓 64)。

「主を恐れる者の生活は、悲しい、いんうつな生活ではない。キリストのない生活こそ、顔つきを憂うつにし、人生を嘆きと悲しみに満ちた生涯とするのである。うぬぼれと自己主義〔自己愛〕にみちている者は、キリストとの生きた個人的交わりを持つ必要を感じない」(実物教訓 142)。

「自尊心という悪は・・・利己心から生ずる」(CT92)。

「彼らは、自分たちのうぬぼれと尊大さ〔高ぶって偉そうにすること〕を脱ぎ捨て、主イエス・キリストを着なければならぬ・・・」(CT508)。

「しかし、心の庭園がおろそかにされるとき、誇りや自尊心、

うぬぼれ〔self-sufficiency〕といった毒草がはびこるのである」(E v 342)。

「誰でも、誇り〔pride〕、自尊心〔self-esteem〕、独善〔self-righteousness〕などに、自分の罪を告白することを妨げさせてはいけません」(FE239)。

「誰でも、衝動、短気、誇り〔プライド〕、利己心、自尊心を抱くならば、大きな害悪を及ぼすであろう・・・」(FE278)。

「自尊心や誇り〔プライド〕といった山や丘は、低くされる必要がある」(AG249)。

「ある人たちは、自尊心により大いなる危険に陥っています」(GW439)。

「キリストの福音という純粋な原則を勤勉に養いましょう。それは自尊心の宗教ではなく、愛と柔和と謙遜の宗教です」(GW447)。

「真理は、偽りを言う人には決して好まれない。柔和は、自尊心や誇り〔pride〕を満足させない」(大争闘下 292)。

「天の王子たち、すなわちこの強大な王国の支配者たちは、もっぱら善いことに限ってのライバル同士であって、お互いの幸福と喜びとを追い求めるのである。そこで最も大いなる者は、最もうぬぼれ〔自尊心〕の小さい者である。そして、その最も小さい者の感謝と豊富な愛は最も大きいのである」(LDE296)。

「キリストがお認めにならなかった階級とは、うぬぼれて他人を見下げていた人々」(ミニストリー 138)。・・・those who

stood apart in self-esteem.

「ひな型であられるキリストを絶えず心の目でとらえておくときに、新しい習慣が形成され、先天的かつ後天的な強力な性癖は征服され、自尊心はちりに伏され、古い思考の習慣は絶えず抵抗にあい、最高位を求める愛欲の本当の卑劣な性質を見せつけられ、克服されるであろう」(OHC99)。

「彼らは、ヨルダンを渡る前に、反抗的なイスラエルと共に死ななければならなかった。もし、モーセとアロンが自尊心をいだいたり、神の警告と譴責に対して怒りをいだいたりしたならば、彼らの罪はさらに大きくなったことであろう」(あけぼの下16)。

「主の恩恵に浴している者たちは、誇りまたは自尊心が最高位を占めることのないよう、絶えず用心している必要がある。並はずれた信奉者がいる人、主から賞賛のお言葉を受けている人は、自尊心と霊的誇りの思いをはぐくむ危険から守られるために、神の忠実な見張り人の特別な祈りを必要とする・・・」(SBO626)。

「・・・こういう曖昧としたまねごとの謙遜は、誇り〔プライド〕と自尊心に満ちた心によって促される。言葉で自分をけなしてみせ、それが他人からの賞賛と感嘆の表現を呼び起こさないとがっかりする人々が多い」(SBO920)。

「自己高揚や自己賞賛はすべて、神及び神がつかわされたイエス・キリストについての無知から生まれる。我々がキリストの品性のたとえようなない魅力を見るとき、どれほど速やかに自尊心は失せ去り、誇りは塵に伏されてしまうことだろうか・・・」

(SBO1243)。

「・・・彼ら〔パリサイ人〕は見せかけの屈服で頭を下げながら、強欲で、自尊心と自負心に満たされていた」(SBN48)。

「彼〔パウロ〕は罪の真のいまわしい姿を見せられて、彼の自尊心は消えてしまい、謙遜になった・・・」(SBN338)。

「・・・尊大さと自負心に満ちてはいけない・・・」(SBN414)。

「ご自分の命を羊に与えた良い羊飼いと、自己尊重、尊大、横柄、教会における支配欲に満たされている人々とを比較しなさい・・・」(SBN464)。

「ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります」(キリストへの道 34)。

「神のみこころは、人間の自尊心〔human pride〕を傷つけるような方法でなされるべきであった」(あ上 285)。「不満と自尊心〔pride〕」(あ下 267)「彼らは自尊心〔pride〕が傷つけられた」(国上 96)。「傲慢で自尊心〔pride〕の強いエホヤキム王と彼のつかさたち」(国下 55) 自尊心〔pride〕を深く傷つけられた再臨信徒たち(大下 110)。「・・・最も自尊心を傷つけないもの〔least humiliating〕を求める」(大下 330)。「パリサイ人たちは自尊心〔self-importance〕が強く、自分を義とする心に満たされていた・・・」(実 346)。

「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない・・・」(ガラテヤ 6：14)。

② self-respect—自尊、自重〔自分の品位を保って、みだりに卑下しないこと〕

「夜更かしは健康をそこない、頭をぼんやりさせて翌日の仕事に支障をきたらせ、人々にも悪い印象を与える。兄弟よ、わたしはあなたがこうした求愛の仕方をいとうほど自尊心を持たれることを望む」（ホーム 52）。

「自分の家を持つという意識は、向上したいとの強い願望をもって彼らを励ます。・・・彼らは自分たちが奴隷ではなく人であると感じ、失った自尊心と道徳的独立心とを大いに取り戻すことができるようになる」（ホーム 420）。

「偽りを語り、欺瞞を行う人は自尊心をも失う。・・・たとえ彼が自分の悪行を人や神の調査からかくすことができたとしても、彼自身がそれを知っているという事実は彼の心や品性を墮落させるのである」（ホーム 443）。

「あなたの資本はあなたの品性である。黄金の宝をたいせつにするように品性をたいせつにしなさい。道徳的廉潔と自尊心と強い抵抗力は、絶やすことなくしっかりとたいせつに持っていないなければならない」（ホーム 459）。

「自尊心、すなわち人としての真の威厳に対する尊敬また人類という大家族の一人びとりに対する関心・・・」（ホーム 485）。（教育 284）

「・・・落胆させず、自尊心を破壊するような悲しむべき余波を残さない、また有用性を妨げることのないようなレクリエーション・・・」(ホーム 590)。

「・・・この種の罪は自尊心と品性の気高さを打ちこわし、・・・」(厳肅 10)。(家教 495)

「軽率で無思慮な言葉を出して、自らをはずかしめるようなことは、決してしないでください。→決して軽率で無思慮な言葉によって、あなたの自尊心を喪失してはいけません」(家教 225)。

「子供たちは自分の能力と生来の思考がそうさせるように、自分で考え自分で行動するように正しく自分を方向づけ、それによって、思考を発達させ、自尊心をもち、自分の力で実行する自信を得るようにならなければならない・・・」(家教 231)。

「彼ら〔子供たち〕が身なりのことでひけめを感じないよう、よく似合う衣服を着せてやりなさい。なぜなら彼らの自尊心が傷つけられるからです」(家教 458)。

「肉体労働が卑しまれる最大の理由は、それが、いいかげんな、考えのないやり方でなされることが多いからである。・・・働く人は、それに気乗りがせず、自尊心もなければ、他人からの尊敬もかち得られない。労作教育によって、こうした弊害が矯正されなければならない」(家教 371)。(教育 262)

「それ〔真の礼儀〕は自尊心すなわち人としての真の威厳に対する尊敬また人類という大家族のひとりびとりに対する関心を教える」(教育 283 - 284)。

「年長の生徒は年下の者を、強い者は弱い者を助けなければならない。そして各人はできる限り、何か自分の得意とするところをすべきである。そうすることによって自尊心が助長され、役立つ者になりたいという願いが生じてくるのである」（教育 336）。

「しかるといふことの真の目的は、悪いことをした本人がその過失を認めてこれを直そうという意志を持ったときに初めて達せられる・・・本人に自尊心を持たせ、勇気と希望を鼓舞しなければならない」（教育 343）。

「過失を犯した者がそれに気づいたとき、自尊心を失わせないように注意しなさい。冷淡や不信頼によって失望させてはならない」（ミニストリー 143）。

「働ける者には無料で衣食住が手に入ると思わせてはならない。・・・自給自足に対する努力はすべて奨励なさい。これは自尊心と独立心を高める」（ミニストリー 152）。

「・・・また自尊心を滅ぼしたり、有用な道を妨げる不幸な影響を残したりすることのないレクリエーションを楽しむことができます。どこへ行くにもイエスと一緒にいき、いつも祈りの心を忘れさえしなければ、絶対に安全です」（青使 25）。

「始終、〔気短できびしい〕ことばを吐き散らす者は、・・・自尊心と自信の喪失を経験し、自分を抑える力を失って、このようなことばを出したことを激しく後悔します」（青使 327）。

「・・・わたしたちを、その父なる神のために、御国の王とし、祭司として下さったかた・・・」（黙示録 1：6 欽定訳）。

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王家の祭司、聖なる国民、神につける民である・・・」(Iペテロ2：9)。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか・・・」(Iヨハネ3：1)。

心を治める方法

子供たちが自分で判断を下すのに十分な年齢に達するまで、ある親たちは、彼らに自分の好き勝手を許すことによって重大な過ちを犯します。この方針により、彼らは子供たちを、助けの手を差し伸べることのできないところにまで追いやるのです。すべての母親に、子供たちが赤ん坊の時から訓練を始めさせなさい。戦いになることは必至ですが、子供たちが大きくなるまで待つ余裕はありません。

もしあなたの子供が何か禁じられている物を手に取るなら、優しくも断固とした態度で、「さわってはいけません」と言いなさい。そうすれば、それを二、三回続けた後には、子供が従うようになることが分かるでしょう。必要ならば、少々厳しい態度で手に触れなさい。彼が再び禁じられた物体にさわるときは、「だめ、だめ、だめ、だめ！さわってはいけません、絶対に」と言いなさい。食卓に座っている間に、かたっぱしから物をつかみたがる幼児を扱うにあたり、この方法が成功を収めるのを、私は何度も見てきました。このような子供たちは抑制されるべきです。彼らがさわってはいけない物があるということを、言って聞かせなさい。乳児期と幼児期にこのように訓練されるなら、非常に幼い時に服従することを学ぶでしょう。

子供たちを治めることにおいて、両親の間に意見の相違があってはなりません。

両親方、子供たちを衝動的にしつけるならば、彼らを必ずサ

タンの障地に置くことになるということを覚えなさい。無分別な言動によって、人心の最悪の感情を刺激し得るのです。乳児期から彼らがあなたを管理ようになる方法で、彼らを管理することができます。しかし、神はあなたに、論理的に考える能力を与えてくださっています。御力によって、家ではあなたに従わせる決心をしなさい。決してあなたの愛と忍耐に、完全な服従のじゃまをさせてはいけません。家庭の女王として、愛のうちに断固とした支配をする母親を、子供たちは尊敬します。

神を畏れつつ家庭を治める母親は、子供がかんしゃくを起こして床の上を転げまわり、激怒して足をバタバタさせて叫ぶのを許すことはないでしょう。もしも子供がこれをしようとするなら、このような行動を繰り返してはならないことを、彼女は彼に理解させることでしょう。もしも母親がコントロールしないならば、サタンがコントロールするでしょう。祈りと忍耐をもって、母親は子供たちの心を正しく指導しようと努め、彼らを義の道に導くべきです。

私の子供たちが非常に幼かった頃、私の感情を乱すことによって、彼らに決して有利な立場を得させまいと私は決心しました。決して、彼らが私をいらだたせることができると思わせるようなことはしませんでした。彼らが服従しなかったときは、彼らを激しくゆすったり、たたいたりはしませんでした。彼らを直ちに罰する代わりに、私は彼らにこう言いました。「夕礼拝が終わるまで、この事については何も語らないようにしましょう。その時に、話し合って解決しましょう。」夕刻には、彼らは落ち着いており、ごめんなさいと言う心構えができています。私はこのようにして、多くの困難を避けました。

いらだって、がみがみと痛烈な言葉を吐くことに意義がある

でしょうか？話し言葉の賜物は、貴重なタラントです。正しい言葉を語ることによって、神に栄光を帰しなさい。(Australasian Signs of the Times, March9,1903)

・しっかりした手

家庭の教育 299 - 300 ページ

何かをねだって聞き入れられなかった子供が、ふくれて床にころがり、足をバタバタさせて泣き叫び、母親のほうは子供の機嫌を直そうとして、なだめたり叱ったりしている、そんな光景を私は何度も目にしました。このような扱いは、ただ子供のカンシャクを増長させるだけです。次には、前と同じようにうまくいくという自信を持って、もっとわがままに、同じことを繰り返します。このようにして、ムチを惜しむために、子供は甘やかされてだめになってしまいます。

母親はどんな場合でも、子供につけこまれるようなことがあってはなりません。また、権威を保つために苛酷な方法に頼る必要もありません。いつも変わらないしっかりした手と、あなたの愛を子供に確信させるようなやさしさが、目的を達してくれるでしょう。

家庭の教育 72 ページ

子供に早くから服従を教える親はほとんどいません。子供が服従を覚えるには早すぎると考えて、親がしつけることを控え

るために、それを始めるのが二、三年遅れるのが普通です。しかしその間に自我は幼児の中でどんどん強くなり、親が子供を制御することが日ごとに困難になってきます。

子供は、非常に若い年齢でも、はっきりと単純なことばで言って聞かせれば、理解することができます。またやさしく、思いやり深く扱えば、服従を教えることもできます。・・・母親はどんな場合でも、親につけ込むようなことを、子供に許してはなりません。しっかりした、むらのないやり方（いつも変わらないしっかりした手）と、子供にあなたの愛を確信させるようなやさしさがあれば、目的を達成することができます。しかし、最初の三年間に、わがままや怒り、また自我を増長させてしまうと、子供を完全にしつけることはむずかしくなります。そのようにしてしまうと、子供の性質は気むずかしくなり、自分のしたい放題のことをするようになり、親の抑制がきかなくなります。このような悪い傾向は、子供が成長するに従ってひどくなり、成人してからはどうにもならないほどのわがままと自製の欠乏のために、彼は国中にはびこっているいろいろな悪事に自分を売ってしまいます。

子供たちが両親を敬わない態度を示すことを決して許してはなりません。子供のわがままな意志を黙って許してはなりません。子供の将来を幸福にするためには、親切でやさしく、しかもしっかりしたしつけが必要です。

家庭の教育 77 - 78 ページ

両親は神の力を受けて立ち上がり、家族の先頭に立って指揮

すべきです。彼らは短気を起こしたり、感情的にならずに、しっかりした手で悪を抑えることを学ばなければなりません。親は何が正しいかを子供たちの考えにまかせておかないで、はっきりした言葉で教え、子供たちがその道に歩むように導くべきです。

・悪霊を叱責

家庭の教育 83 - 84 ページ

私は、幼児が何かの理由で自分の思うことが通らないと、体を投げ出したり泣き叫んだりするのをたびたび見ました。こういう時こそ、その悪い心を叱らなければなりません（この時こそ、悪霊を叱責すべきです）。敵は子供の心を制御（コントロール）しようとするでしょう。私たちは敵が意のままに子供の性格を作るのを許してよいのでしょうか。幼児たちはどんな精神が彼らに影響を与えているかを見分けることができません。ですから親は彼らに代わって判断し識別すべきです。親は子供の習慣を注意深く見守らなければなりません。悪い傾向を抑制し、幼児の心が正しいことを好むように励ますべきです。幼児が自分を統御できるように、あらゆる努力を払って、彼らを励ましませう。

家庭の教育 284 - 285 ページ

母親は時には子供に好きなようにさせ、望みどおりにさせて、親の言うことをきかないままにさせてもよいのでしょうか。いい

え、とんでもありません。なぜならそんなことをすれば必ず、ぞっとするようなサタンの旗を、家の中に立てさせてしまうことになるからです。母親は、子供が一人では戦うことのできない戦いを戦ってやらねばなりません。悪魔を叱責し、熱心に神を求め、決してサタンに子供を奪われないようにすることが、母親の務めなのです。

・モーセの母（生き残る人々より）

忠実に教えることによって、彼女は息子の幼い心に、神を畏れる思いと、真実と正義を愛する思いをつぎ込んでいきました。彼女の努力はそれだけにとどまることなく、息子があらゆる腐敗的な影響から守られるよう真剣に祈りました。彼女は息子に、生ける神の前にひざまずいて祈ることを教えました。神だけが、いかなる緊急事態にあっても彼の祈りを聞いて、助けることができるからでした。彼女は、偶像礼拝が罪であることを彼の心に刻みつけようと努めました。彼がまもなく彼女の感化から離れて、養母である王女の手任され、天地の創造主がおられることなど信じさせないような感化に取り囲まれることを知っていたのでした。モーセが両親から受けた教育は、彼の精神を堅固にし、得意になったり罪にそまって墮落したり、あるいは宮廷生活の華美と放縦の只中であって高慢になったりするののないように、彼を守ってくれるものでありました。彼は聡明な知性と物わがりのよい心の持ち主で、少年時代に受けた敬虔な印象が失われることはありませんでした。

・むちと懲らしめ

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れません。・・・あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます」(詩篇 23 : 4)。

「わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。その戒めを嫌ってはならない」(箴言 3 : 11)。

「戒めはともしびである。教えは光である。教訓の懲らしめは命の道である」(箴言 6 : 23)。

「教訓を守る者は命の道にあり、懲らしめを捨てる者は道をふみ迷う」(箴言 10 : 17)。

「戒めを愛する人は知識を愛する。懲らしめを憎む者は愚かである」(箴言 12 : 1)。

「知恵ある子は父の教訓を聞く。あざける者は懲らしめを聞かない」(箴言 13 : 1)。

「むちを加えない者はその子を憎むのである。子を愛する者は、努めてこれを懲らしめる」(箴言 13 : 24)。

「愚かなことが子供の心の中につながれている。懲らしめのむちはこれを遠く追い出す」(箴言 22 : 15)。

「子を懲らすことを差し控えてはならない。むちで彼を打っても死ぬことはない。もし、むちで彼を打つならば、その命を黄泉から救うことができる」(箴言 23 : 13 - 14)。

「望みのあるうちに自分の子を懲らせ。泣くからといって、容

赦してはならない」(箴言 19：18)。下句は欽定訳

「むちと戒めとは知恵を与える。わがままにさせた子は、その母に恥をもたらす。あなたの子を懲らしめよ。そうすれば彼はあなたを安らかにし、またあなたの心に喜びを与える」(箴言 29：15, 17)。

「すべてわたしの愛している者を、わたしははしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい」(黙示録 3：19)。

「主よ、わたしを懲らしてください。正しい道にしたがって、怒らずに懲らしてください。さもないと、わたしは無に帰してしまうでしょう」(エレミヤ 10：24)。

・愛の神の訴え

「・・・わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたは どうして死んでよかろうか」(エゼキエル 33：11)。

「あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとがを捨て去り、新しい心と、新しい霊とを得よ。イスラエルの家よ、あなたがたは どうして死んでよかろうか。わたしは何人の死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル 18：31 - 32)。